サイダー

隈元　達雄

日曜日の朝、テレビコマーシャルを見ていて、子供の頃のことをほろ苦く、いや、今となっては懐かしく思い出して一人苦笑いをした。
それは、新作のコカ・コーラのコマーシャルだ。コーラを飲んだ人物がブルブルと震えるやつだ。
小学３年生の途中で疎開先の東郷町から鹿児島に帰ってきた。そして武岡の下に大叔父（父方祖母の末弟）の世話で一軒の借家を借りることができた。
父は戦死をし、母と姉３人、弟、私に祖母をいれての７人家族である。
働き手は母が一人。姉たちが高校を卒業して働き手になるまではしばらく時間があった。そんななかで高齢の祖母は軽い狭心症などで病院の薬は欠かせなかった。それでも往診や薬などの心配などなくあの時代に養生できたのは、大叔父のおかげであった。大叔父は西田の本通りで内科の開業医であった。
祖母だけでなく、私達家族や親戚も病気になると“西田の叔父さん”を頼ったものだ。時には母の親戚の往診に東郷町まで戦前戦後とも行ってくれていたようだ。私の弟も疎開先の東郷町で肺炎に罹り生死の境をさまよったが、当時珍しかったペニシリンの注射で大叔父に助けてもらった。
そういうなかで、私はよく薬をもらいに西田の病院まで通った。週一回くらいのペースだったと思うがいつも病院の玄関からではなく、勝手口から入っていた。そしてしばらく待っていると“西田の叔母さん”が薬と一緒におやつなどをハンカチに包んで「これは帰ってから食べやんせ」と当時としては珍しい物などを持たせてくれたものだった。もちろん薬代など払ったことはなかった。
そしてたまに父の従兄弟にあたる息子たちがいると「達雄、表にまわらんか」と言われて庭から座敷や縁側に上がり込み、おやつや飲み物を一緒に飲み食いした。そんなある日「良か清涼飲料水があっで飲まんか」と言われて飲んだのが今　思うとサイダーだったのだ。小学校４～５年生だったから、昭和２４～２５年ころのことだったのだろう。貧乏な家庭であった我が家でそんなものなど飲めるわけでもなく、コップにプクプクと出てくる泡を眺めながら飲んだ。
その味はそれまで飲んだことのない喉をさすようで、だけど甘い不思議な飲み物だった。自分でもおいしく飲んだのか、珍妙な顔だったのか記憶にない。
そして、事件？が起こったのはすぐその後のことだ。さよならを言って病院から出てすぐ左に本屋さんがあったのだが、その本屋さんの角を曲がるか曲がらないうちにいきなりゲップがこみ上げてきた。しかも今まで経験したことのない強烈なゲップである。しかしその飲み物の名前も知らず、ましてや炭酸入りなんてことも知る由もない当時のことである。食べたり飲んだりした物がなにか悪いものだったのかなと思い、思わず病院に引き返そうとしたが、頭のなかで「いや　病院で悪いものを食べさせたり、飲ませたりする訳がない」と言い聞かせて引き返すのはやめた。しばらく歩いていると再びゲップが出たが、最初の時ほどではない。それでホッとして家に帰った。家族にその話しをしたらいつの間にかその話が親戚中に伝わり、大恥をかいてしまった。
いまでも盆・正月などに親戚が集まるとその話が出たりするくらいだ。
ラムネを六月燈などで飲めるようになったのは、その事件の何年も後だったような気がする。
コーラの初体験も印象に残っている。それは大学の何年生のことだったかは、忘れてしまったが、ある夏、東京の大学に行った友人が夏休みに帰鹿して、一緒に何かのコンサートに行っての帰りのことだった。天文館のとある喫茶店に入って、私はアイスコーヒーを友人は別な飲み物をオーダーした。友人から勧められて一口飲んだのが、コーラだった。その時は田舎者の私は当時あった“水薬”に似ているなあ　これのどこが良いのだろうと思ったものだ。しかしその後はビールも一口で真っ赤になる私には、夏のお気に入りの飲み物の一つになった。
我が家が一番苦しかった時代に筆舌に尽くしがたい“西田の叔父さん”や今も付き合いのあるとその家族には感謝の他ない。お墓も我が家の墓と１０ｍくらいしか離れていないので、墓参りの時にはいつも手を合わせている。時には孫たちも連れて行きお詣りするが、「そや　達雄が孫たっか」と喜んでくれているような気がする。

（２００９，６月記）